

ヘミングウェイ作品に於ける戦争についての一考察

田 中 博

はじめに

歴史書をひもといてみれば、それは人間の闘争の跡づけといえる。それは人間の本性に根ざしているのだと断言されそうな様相をしているのだが、闘争の形態もその原因も、近代になって一段と大きな変転をなし、特に第一次世界大戦や、第二次世界大戦は、別名ファシズムと反ファシズムの闘いといわれる程、イデオロギの争いと言う色彩が濃い。そして、いままでにない多くの人々をこの戦争の中に引づり込み、生死のふちをさまよい歩かせ、戦争の大きな枠組みの中で、個人の生死があまりにも小さいことをいやという程知らされた。それ故に一段と真剣に戦争とは何か？そして人々の幸福が、戦争をのり越えていかに考えられるのかを、伶俐な作家の目がとらえた作品が近年多くあった。一連の近代戦の中に生きた、アーネスト・ヘミングウェイも又その中の一人である。彼は進んで、報道記者として、又は志願兵として、主として第一次世界大戦、スペイン市民戦争、第二次世界大戦に深くかかわり、幾多の作品を創出した。前回は『誰が為に鐘は鳴る』“For Whom The Bell Tolls” 1940, を中心に、ヘミングウェイ文学の限界として、彼の戦争に対する取組みの不十分点を指摘したが、今回は、その彼と戦争とのかかわりや、その作品での戦争をどう取り上げたのかを概観し、再度作品批判を試みたい。

(I)

特に、ヘミングウェイの主作品『日は又昇る』“The Sun Also Rises” 1926, 『武器よさらば』“A Farewell to Arms” 1929, 『河を渡って木立の中へ』“Across The River and Into The Trees” 1950, は第一次世界大戦からスペイン市民戦争、第二次世界大戦を重大な背景として描かれているので、簡単に三つの戦争の時代背景をふり返っておきたい。

1914年にはじまった第一次世界大戦は、帝国主義列強の世界分割競争に大いに原因しており、その大戦の最中、列強の一つ、ロシアで革命が起っている。1930年代は世界恐慌という大嵐ではじまり、世界的規模でのイデオロギ状況の両極分解ともいべき様相が現われた。すなわち、一方は共産主義、他方はファシズム。1933年1月30日、ドイツにヒトラ政権が成立。1935年のコミンテルン第7回大会で、ファシズムに反対して、民主主義を擁護する「人民戦線」戦術が採択された。しかし当時西欧民主主義国も反共産主義という点ではファシズムと共通しており、ヒ

トラは共産主義に反対するという大義名分を持ち出せば、西欧民主主義もフアシズム諸国の行動を黙認するであろうと考えたのである。事実、それは成功を取めた。その好例がスペイン市民戦争であった。そのいきおいでフアシズム諸国は、第二次世界大戦になだれ込んでいったがフアシズム体制の敗北という形で終局をむかえた。第二次世界大戦後「民主主義」は国際的に否定すべくもない原則として建前化されたが、真の民主主義はイデオロギ戦争の中で見失われがちである。

(II)

第一次世界大戦後の青年達を描いた『日は又昇る』、『武器よさらば』は、彼が最初に、赤十字要員として、又その後志願兵として、イタリ戦線に出むいたが、これは、その経験をあつかったものであり、『誰が為に鐘は鳴る』は、彼のスペイン市民戦争の経験を土台にしたゲリラ活動をあつかったものだ。全ての戦争体験をふり返って、再びイタリのベニスを舞台にしたのが、『河を渡って木立の中へ』、他に短編や戯曲を含めれば、数多くの作品の中で、戦争が題材になっている。だが彼の諸作品の中で、本当に戦争の背景をとらえて、戦争そのものを見通す広い社会的視野でとらえることが出来ているのかを是非読みかえしておきたいと思う。時代背景でもみたように、ヘミングウェイは、第一次世界大戦のイタリ戦線に赤十字要員募集に応募し、新聞社を辞してヨーロッパに渡った。その動機は、いくつかの資料を見ても、新聞記者が現場のまっただ中に居ることに強い刺激を受けるように、より強烈な緊張感を求めて出掛けた以外のものは見当らぬのである。イタリ戦線で重傷を負ったが、ミラノ陸軍病院を三ヶ月後に退院、再びイタリ軍歩兵として再度志願し、第一次世界大戦休戦になるまで、参加している。実はこの経験が『武器よさらば』の背景となっている。1936年7月スペイン市民戦争 Spanish Civil War (1936~1939) 勃発直後共和国政府援助のための資金カンパに乗り出し、反フアシズムに肩入れをした。多くの国際旅団に参加した学者や文化人の代表的人物としてヘミングウェイは考えられがちだが、これはそんな政治的・社会的理念に基づいたものでなく、こよなく愛したスペインの風土や、闘牛や、民衆への愛着がそうさせたという説(1)をとった方が理解しやすい程である。そのことは『誰が為に鐘は鳴る』の主人公、ロバート・ショーダンで後で再検討すれば明確になる。『河を渡って木立の中へ』は、昔なつかしいベニスに帰ったアメリカ大佐の老らくの恋という回想の中に、過去の戦争の話若くは若い愛人に対して語られるもので、ここでは取り扱うまでもないと思う。簡単に三つの作品をふり返ってみたのだが、数多くの作品中、ここでは二つの作品、すなわち『武器よさらば』と『誰が為に鐘は鳴る』を中心に考察することにする。

(III)

『武器よさらば』に於ける主人公、フレデリック・ヘンリがアメリカ人という設定で、その彼

が、イタリ戦線に参加している理由は何か？これは、やはり重要な問題である。外国人が、わざわざ他国の軍隊に志願して参加するにはそれなりの理由や動機が存在するはずである。そうでなければ無責任きわまりないではないだろうか。主人公ヘンリく状況的見地から、彼がヘミングウェイの分身であるとして見てよいだろうが、If you serve time for society, democracy, and … (2) というようなものではなく、極端に云えば戦争に於ける、名誉や自己だめしや野望のために参加したのではないかと云えなくもない。実際『武器よさらば』では次のような主人公とミス・バークレとの会話がかわされている。

Miss Barkley said, 'you're not an Italian, are you?' 'Oh, no.'
Rinaldi was talking with the other nurse. They were laughing.
'What an odd thing—to be in the Italian army.'
'It's not really the army. It's only the ambulance.'
'It's very odd though. Why did you do it?'
'I don't know,' I said. 'There isn't always an explanation for everything.' (3)

このヘンリの「ものごとはいつも説明がつくとはかぎりませんよ」によってその答は切り捨てられるが、やはりこの疑問は、現実にもたびたび彼にあびせかけられ、自問自答もあったのだろう、同じ作品の又すぐ後にもそれはくり返されている。それ程不自然でもあるのだ。

'You're the American in the Italian army?' She asked.
'Yes, ma'am.'
'How did you happen to do that? Why didn't you join up with us?'
'I don't know,' I said, 'Could I join now?'
'I'm afraid not now. Tell me. Why did you join up with the Italians?'
'I was in Italy,' I said, 'and I spoke Italian.' (4)

イタリ戦線に参加している、ヘンリの理由は、'I was in Italy,' I said, 'and I spoke Italian.' しかなく、現実のヘミングウェイには、前出の 'There isn't always an explanation for everything.' を出る答は無かったのだと推測出来る。それだけに彼と戦争との関わりは、個人的でかつアウトサイダ的無責任さがつきまとう。それ故に、ヘンリの戦線離脱は起る。

I looked at the carabinieri. They were looking at the newcomers. The others were looking at the colonel. I ducked down, pushed between two men, and ran for the river, my head down. (5)

理由のない、外国人の戦争参加はいかに、危険なものであるかは、言論外である。戦線にとどまる理由もまたない。だから、単独講和は当然だろう。

They got off at Gallarate and I was glad to be alone. I had the paper but I did not read it because I did not want to read about the war. I was going to forget the war.

I had made a separate peace. I felt damned loudly and …… (6)

一体ヘミングウェイは、ヘンリをして何を語ろうとしたのか？戦争に於ける、否戦場と訂正しよう。それは極端に云えば、ラブストーリー、それもまことに甘いと云える。だが、彼、ヘミングウェイの戦争に対する態度は一応表明している『死者の博物誌』では、「また戦争の興味深い一面は、博物学者が驃馬の死体を観察出来るのは、そこしかないということだ」人間やその他の物の死を直視しリアルに描くことによって、戦争の真実が浮かび出るかの如き主張があるが、これは一貫した彼の態度である。『アフリカの緑の丘』では、戦争と作家について次のようにふれている。

…… and I thought about Tolstoy and about what a great advantage an experience of war was to a writer. It was one of the major subjects and certainly one of the hardest to write truly of, and those writers who had not seen it were always very jealous and tired to make it seem unimportant, or abnormal, or a disease as a subject, while, really, it was just something quite irreplaceable that they had missed. (7)

作家の戦争体験を高く評価し、未体験者の戦争批判を、批判にならぬものとの彼の態度が表明されている。もう一度話を本題にもどして、イタリ戦線に出ていった、ヘンリことヘミングウェイには、新聞社の友人達にイタリからのたより等に見られる、緊迫する戦場への熱烈な希求と、ミラノ等での戦争の様子を、事件にありついた現場記者のように喜々としている様子から推測しても、さしたる社会的理由はなかったのだろうと思う。それ故に現実の戦場での死と、かしゃくない戦争体制の組織を前にして、ヘンリの戦線からの離脱は必然である。そして単独講和は結んだものの、ヘンリにもその矛盾とうしろめたさは残るものだ。

'Don't talk about the war,' I said. The war was along way away. …… I had the feeling of a boy who thinks of what is happening at a certain hour at the schoolhouse from which he has played traunt. (8)

そして、その悩みこそは直視され、解析されねばならぬものだと私は思う。愛人、キャサリンとの合一という、世界の統一は、それを解決させえない。

'I feel like a criminal. I've deserted from the army.'

'Darling, please be sensible. It's not deserting from the army. It's only the Italian army.' (9)

キャサリンは、ヘンリの一部の本音を代弁した。脱走したのは、たかがイタリ軍じゃないのかと。最初に指摘した、イタリ軍参加の理由の不明確と、この解決策は一致している。彼の不安をかき消すのは、

'Let's not think about anything.' (10)

「考えないことにしよう。」である。

(IV)

『誰が為に鐘は鳴る』は、スペイン市民戦争でのゲリラ活動を背景にしたものである。この内乱はファシスト・フランコ將軍と人民戦線政府との間での、ファシスト側と反ファシスト側の鮮明な闘いであったことは有名である。彼、ヘミングウェイは、政府軍に援助をおしまず、身を危険にさらしてファシストと闘ったのは、スペイン市民戦争関係の歴史書にも載るほど有名な事実であった。その体験が、この作品の裏づけになっているのは推測するまでもないであろう。『誰が為に鐘は鳴る』の主人公、ロバート・ジョーダン、再びアメリカ人で、スペイン語講師と云う設定である。ロバート・ジョーダンは何故に、外国の戦争に参加したのか。

He fought now in this war because it had started in a country that he loved and he believed in the Republic and that if it were destroyed life would be undearable for all those people who believed in it. (11)

前出のイタリ戦線のヘンリの答、イタリに居て、イタリ語が話せたという、外国人の戦争参加理由から発展しているとは云いがたい。スペインを愛し、共和政府を信じたとしても、それは個人的連帯感しか感じられない。具体的にスペイン人民の意志と結ぶ連帯が充分でなく、個人的な好みで、外国から参戦されてはたまらない。人民戦線に肩入れするのはどういう理由かは具体化されずに、かえって人民戦線側にいるジョーダンを中立公正なものとしようとして混乱を起させている。

What were his politics then? He had now, he told himself. But do not tell anyone else that, he thought. Don't ever admit that. And what are you going to do afterwards? I am going back and earn my living teaching Spanish as before, and I am going to write a true book. I'll bet, he said. I'll bet that will be easy. (12)

前出の所で共和主義者と述べ、すぐそばで政治的意見を持たぬのだという人間像は論理的矛盾をさらけ出すものだ。戦争が終れば、戦争についての真実の書を書くというのは、彼が真実というのは、ただ事実を直視し、あるがままを書けば、真実であるかの如き表現にとれる。

Here in Spain the Communists offered the best discipline and soundest and sanest for the prosecution of the war. He accepted their discipline for the duration of the war because, in the conduct of the war, they were the only party whose programme and whose discipline he could respect. (13)

こんな危険な思想があるのだろうか。スペインに於ては、共産主義者に訓練を受けるが、その理由が共産党が戦争遂行のために、最善の訓練ともっとも健全にしてもっとも真剣な人間を提供したし、彼等は戦争の指導という点では、彼にとって尊敬できる訓練と計画をもったただ一つの党であったからだと云うのである。

You're not a real Marxist and you know it. You believe in Liberty, Equality, and

Fraternity. You believe in Life, Liberty, and the Pursuit of Happiness. Don't ever kid yourself with too much dialectics. They are for some but not for you. You have to know them in order not to be a sucker.…… But afterwards you can discard what you do not believe in. (14)

ここには、一つの世界観の確立があつての社会的連帯に結ばれて行動するロバート・ジョーダンではないことが明確に示されている。共産党が戦争を遂行するのにもっとも彼にとって都合がよかつたからであり、共産主義者ではなく、自由、平等、博愛を信じて、この戦いを成功させるのに、手段として、連帯をするのだという主張に見える。だから、戦いが終れば、信じていない共産主義者との連帯は、おさらばだと明言できるのである。このことは裏がえして云うと、本当に彼、ロバート・ジョーダンが反ファシストの立場に立ってこの戦争を理解していたのか疑問に思えてくる。なぜなら、このスペイン市民戦争でのフランコと強力に連結していた独・伊のファシスト達の理念、例えばナチス・ヒトラーの云う、自由や社会的平等を題目に、盲目的力の政策は、ジョーダン、否、ヘミングウェイが、幾多の作品の中で表明してきた主観的、個人主義的自由、平等、博愛への熱情の力への信頼は、表裏一体をなしているものではないのかという疑惑をなくすことは出来ない。少なくとも「考えるな」「行動せよ」と云う彼の考えは、理性的批判や、統一世界観喪失のカオス状況の中で、原始的、盲目的力への信頼という人間の弱点に強く働きかけ、個人的、主観的英雄偶像崇拜への土壌を作り出しているという危険性を感じさせる。

結 び

以上、二作品を検討したが、それを簡単にまとめて、結びにかえる。

1) フレデリック・ヘンリの戦争参加は、イタリに居たことと、イタリ語が話せるという答えにならぬものである。

ロバート・ジョーダンの参戦理由は、スペインを愛し、共和制を信じていたそのものが破壊されるのをみてとある。ヘンリもジョーダンもアメリカ人で、前者はイタリに志願し、スペインゲリラ戦につくということ自体にきわめて危険な設定がなされ、幾多の言葉で、戦争の死のさまを目をはなさず描写することが作家に大切かを弁明しても、リアルな戦場に於ける戦死の背後にある、戦争の社会的状況の理論的分析と総合のないところでの「直視」の主張は、盲目行動と批判される可能性をひめている。

2) 特に『武器よさらば』での、フレデリック・ヘンリの社会的状況からの孤立は明白で、戦争を書いたと云うよりも、戦場での死と暴力とキャサリンとの孤立した二人の世界での合一を描いたにすぎない。単独講和はイタリ兵との連帯もなければ、参戦への国民的世界観の統一をも持ちえない。

3) 『誰が為に鐘は鳴る』のロバート・ジョーダンは、ヘンリとは違って社会的孤立によって

戦場離脱は起らなかったが、(IV)で検討した通り、社会集団との連帯を持つには至らず、ヘミングウェイ独自の道徳律で闘い抜くという個人的解決を越えるものではなかった。

4) しかし、ヘンリとジョーダンには微妙な差はある。あえて比較すれば、社会への連帯を参戦理由の中に示している。「自分の愛する国に起ったが故にこれに加わった。」又、

I have fought for what I believed in for a year now. If we win here we will everywhere. The world is a fine place and worth the fighting for and I hate very much to leave it. (15)

一部の勝利が全体の勝利につながることや、この世がすばらしく美しいところで、命をかけて守る値いがあるとのべているのだが、作品全体にこの主題が、具体的展望をもたず、肯定的世界像が創出されないところに重大な欠点を持っている。

(注)

- 1) 世界文学全集39『誰がために鐘は鳴る』P.527 (解説)
- 2) E. Hemingway "Green Hills of Africa" II Chapter Six P.126
- 3) E. Hemingway "A Farewell to Arms" Chapter 4. P.18. Penguin Books.
- 4) Ibid. Chapter 5. P.21
- 5) Ibid. Chapter 30. P.176
- 6) Ibid. Chapter 34. P.188
- 7) E. Hemingway "Green Hills of Africa" Chapter 2. P.63 Penguin Books.
- 8) E. Hemingway "A Farewell to Arms" Chapter 34. P.189
- 9) Ibid. Chapter 34. P.194
- 10) Ibid. Chapter 34. P.195
- 11) E. Hemingway "For Whom The Bell Tolls" Chapter XIII. P.158 Penguin Books.
- 12) Ibid. Chapter XIII. P.158
- 13) Ibid. Chapter XIII. P.158
- 14) Ibid. Chapter 26. P.289
- 15) E. Hemingway "For Whom The Bell Tolls" Chapter 43. P.440